

(続紙 1)

京都大学	博士 (教育学)	氏名	鄭 谷心
論文題目	近代中国における国語教育改革に関する研究 ——白話文教育方法論史の視点から——		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本研究は、近代中国における主要な国語教育改革の方法論がいかに成立・展開し、その過程において、いかなる成果と課題をもたらしたのかを明らかにしようとするものである。古代中国では、統一的な教育が行われたため、国語という独立した教科が存在せず、かつ標準的な共通語すら存在していなかった。20 世紀に入ってから中国においてはようやく国語科が成立する。その成立過程は、民間における「国語運動」と緊密に連動していた。「国語運動」とは、民衆が使う共通語である「国語」(口語)を確立しようとした一連の運動のことをいい、言文一致運動、国語統一運動、白話文運動に大別することができる。中華民国が成立する 1920 年代から 1930 年代までの時期は丁度この 3 つの運動が合流した時期であり、それらの運動は近代中国における国語教育の形成に大きな影響を及ぼした。本研究は、主にこの時期における白話文教育の理論と実践を扱う。すなわち、「代聖賢立言(経書と典故を引用し、聖人・賢人が持つ思想と見解を支持することができるが、自分の思想や見解を述べてはいけない)」という八股文の時代が終焉し、新たな白話文教育が展開されることにより、近代中国における国語教育のあり方がいかに進化したのかを探ろうとしたものである。</p> <p>従来 of 先行研究は、国語教育の変遷を学校制度と新学制の成立史、国語教科書・専門書の編纂史、新文化運動史、国語・作文教授史と結び付けて概観したものであり、主として史的アプローチによるものであった。また、人物研究のアプローチと国際比較のアプローチによるものや、命題作文における命題の機能とあり方について解明するアプローチも散見される。ただし、これらのマクロとミクロな視点からの研究はいずれも近代中国の国語教育における方法論の系譜に目が向かず、白話文教育はどのような思想に基づいて成立したのか、その内在的な理論と方法とは何か、また、それらがどのように影響し、進展してきたかという継承関係が未整理のままであった。それに対して、本研究は、これらの課題を意識し、近代中国において代表的な国語教育者を取り上げ、彼らの近代における国語教育改革の思想や理論だけではなく、課程標準と教材開発、授業設計、社会活動などの実践を通して、その人物による方法論の内在的な継承と発展、または対立と共存の関係を整理し、明らかにしたものである。そのために本研究では次の二つの分析視角を意識している。第 1 に、国語の形成にかかわる理念と方法とは何か、それらは学校教育においてどのように教授法として具現化されたのか。第 2 に、外発的な理論と内発的な文化との相互作用の中で、近代中国の作文教育における生活性と科学性がいかに樹立されたのか。これらの二つの分析視角を念頭に置いて、本研究は、近代中国における国語教育方法論の形成に大きく寄与した 3 人の国語教育者に着目している。以下、本研究は、3 部構成を採っている。</p> <p>第 1 部では、国語教育方法論の萌芽として、デューイから強い影響を受けて、新しい白話文学を国語の統一に結び付けて中学校国語カリキュラムの形成に貢献した胡適の理論を取り上げている。胡適の国語教育改革論と当時中国の国語教育が直面した独自の課題を解決するための理論、および国語カリキュラムと教授法を建設するための理論とそれをめぐる論争を考察している。第 2 部では、胡適とともに課程標準を作り上げ、新しい作文教</p>			

育の理論を編み出し、教材開発にも尽力した葉聖陶に着目している。白話文運動・国語運動が推進される時代の流れのなかで、葉聖陶の国語教育や作文教育の方法論において、何が継承され、何が発展させられたのかを明らかにしている。第3部では、国語・作文教育のもう一つの潮流として、夏丏尊(カメンソン)の理論と実践を中心に取り上げている。国語教育改革に伴い新たな課題と困難が次々と出現し、それを乗り越えるために夏がどのような理論を提案し、またどのような実践を示したのかを検討している。

以上の詳細な検討を踏まえて、この時期の国語教育改革の内実として、次の三点にわたる総括的結論を導いている。第一は、近代教育学を継承し、実質陶冶と形式陶冶の共存を基本的な教育目標とすべきこと。第二は、何のための国語教育なのかを常に念頭に置き、最低限必要な国語学力の明確化をめざすべきであること。第三は、初等教育段階から中等教育段階までの教材編成において、生活と科学の結合という顕在的なカリキュラムを編成するとともに、新しい時代における社会の変革者の誕生を促すような潜在的なカリキュラムも教師によって意図的に開発されるべきであるという点である。とりわけ、作文教育においては、「内容面としての生活化」、「方法面としての科学化と総合化」が特徴であると結論付けている。

(続紙 2)

(論文審査の結果の要旨)

本研究は、近代中国における主要な国語教育改革の方法論がいかに成立・展開し、その過程において、いかなる成果と課題をもたらしたのかを明らかにしたものである。

近年、中国の若者の作文力の低下が問題視され、従来の国語教育の見直しが余儀なくされるようになってきている。しかしながら、中華民国成立前後にあたる近代中国における国語科や白話文教育が成立する過程では、その教育方法論が豊かに蓄積されているにもかかわらず、先行研究においては教育方法論の分析視角からの検討は不十分であった。とりわけ、教育方法論史の視点から白話文教育の成立する系譜を提示した先行研究は皆無であった。そもそも「国語」とは何なのか、なぜ白話が文言に取って代わる必要があるのか。本論文では、このような根本的な問いから出発し、近代中国における国語教育改革の理論的な背景を整理し、国語教育の方法論がいかに成立・展開し、その結果はいかなる成果と課題をもたらしたのかを検討している。そのために、近代中国を代表する三名の国語教育者（胡適、葉聖陶、夏丏尊カメンソン）を取り上げ、彼らの国語教育改革の思想と理論を検討するとともに、さらには課程標準の編成と教材開発、授業設計などの教育方法レベルの分析を通して、この時期の国語教育改革の方法論の内在的な継承と発展、または対立と共存の関係を総合的に考察することに成功している。とくに第8章を構成している「夏丏尊による国語教育方法論に関する提案」は、日本人学生とっても掲載が困難とされる日本教育方法学会紀要『教育方法学研究』第40巻に投稿された査読論文が基礎になっており、その研究水準の高さが当該学会においても証明されているところである。

このように考察された近代中国における国語教育改革の特質から、とりわけ重要と考えられる成果を以下三点にまとめておきたい。

第一は、白話文教育方法論の「外発」的な側面だけではなく、「内発」的な側面も射程に入れて、両者が結合した実態を明らかにした点である。たとえば、デューイによる「思考の方法」の五段階を紹介した胡適が、思考における「反省的な経験の一般的な性格」に代えて、信頼性を証明するための「真正な思考の訓練」を強調したことは、当時の中国社会において迷信や権威に追従する民衆を啓蒙する意図があったためであり、さらにはそのことを可能としたのは、中国における清代考証学という内発的な理論の素地があったからであることを指摘している。また、デューイの教育哲学に関する受容のあり方の相違として、梁啓超が言語の構成と機能面を重視したのに対して、葉聖陶は学校と社会生活の連続性という観点を白話教育に取り入れたことを分析した。このように、「外発」と「内発」の両側面から白話文教育方法論の成立と展開を検討した本論文は、従来の中国における教育研究の空白を埋める意義を有する。

第二は、作文教育において求められている学力とは何かを検討することで、科学的な作文教育方法論の内容を明らかにした点である。たとえば、胡適は、生きた文学を創造するために、小学校段階では内面的な審美的価値を重視する「想像力」の重要性を説いたが、中学校段階では、文学の観賞力・想像力を重視するか、実用文を書くような観察力と緻密な記述力を優先するかについて、胡適と梁啓超の意見が分かれた。後に葉聖陶は自らの作文論において両者の意見を集約し、近代中国における科学的・系統的な作文教育方法論を提案した。さらに、葉聖陶の理論と夏による「真実」を重視する作文指導とが合流し、新たな学力と授業のあり方として結実したことを、本論文は明示している。こうした作文教育において、育成すべき学力とは何かという目標論を中軸に据え、人物による作文教育方法論の展開を顕在化させたことも本論文の特色であるといえよう。

第三は、人物の理論における継承関係だけではなく、その継承関係は国語教育改革の実践や運動にどのように反映されたのかという実態を解明した点である。たとえば、

胡適がデューイの「実験主義」における科学的な方法を引き継ぎ、新しい白話の文学を創造するための「文学の方法」を提示したことを考察することで、胡適が、理論上だけでなく、実践上も、白話文学による言文一致運動と国語運動の合流と発展に寄与したことを指摘している。

一方、胡適の国語カリキュラム論と方法論をめぐる論争からヒントを得た葉聖陶は、必要最小限の国語基準を提示する中学生国語課程標準を起草した。そこには、中学校において実用文を重視する梁啓超の考えが受け継がれるとともに、文学の鑑賞力の向上を目指す胡適の主張も反映されていた。また、教材開発の検討を通して、葉聖陶が具体的に、児童の学校生活と社会生活のつながりをどのように意識して教育を営んだかを明らかにしている。さらに、葉聖陶と夏丏尊の共同執筆による教育小説を分析することで、その理論に即した国語教育のあり方と特徴を明らかにしている。こうした検討により、近代中国における白話文教育を、理論と実践が断絶された歴史の断片としてではなく、連続した教育方法論史の系譜として描くことに成功している。

なお、口頭試問においては、以下の指摘がなされた。アメリカの進歩主義に影響された国語教育者たちの重要性と同時に、その潮流に回収されない国語教育者たちの動向も視野に入れることで、本研究の歴史的客観性がさらに向上したのではないか。また、本研究でも部分的に指摘している鈴木三重吉等による「赤い鳥」の影響や及川平治による「分团的動的教育法」の導入等、日本の大正期自由教育との日中間の交流をさらに緻密に描くことによって、本研究はさらに深く彫琢されるのではないかというものである。

このように、本論文は今後の課題を残すものの、それらは本論文の学問的意義を損なうものではない。口頭試問では、これらの課題についての的確な応答が行われ、本人も今後の研究課題としてさらなる研究に邁進する決意を示している。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成27年7月28日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、(期間未定)当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降